

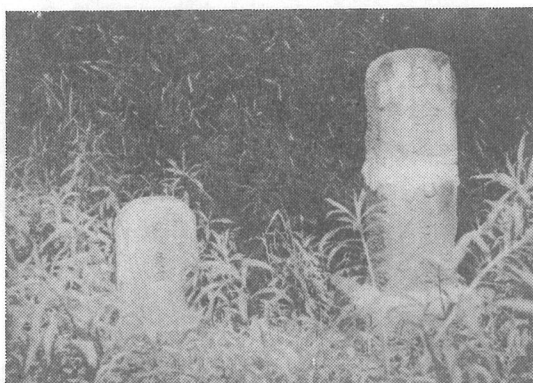
横芝の碑

(その六十九)

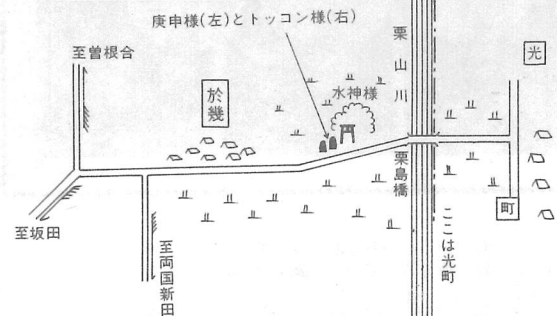
於幾の琴平街道に建つ二つの碑

庚申の巻

横芝町於幾と、光町宝米、傍爾戸（ほうじど）などは、栗山川を距てて上総と下総にわかれていますが、ここにかかっている栗島橋（昔は俗にガタクリ橋とも呼んでいた）のお陰で古くから交通が開けました。そうしたことから、於幾の神社という、まず集落の中央に建っている栗島橋が挙げられますが、この地域の産土の神は、集落から少し外れた栗島橋に近い道端に鎮座する水神様なのです。



案内図



その水神様の森の入口に、二つの石造が建っています。一つは庚申様で、いま一つは、於幾の人々がトツコン様と呼んでいる眼の病に霊験があらたかであるという石像です。

栗山川は、大正の初期に実施された河川改修までは、川底が浅く、川中の広狭も烈しかったので、平常は水が流失してしまうので、耕地の用水として取水するには大変な苦勞があったようです。その

反面、少し大雨が降り続いたりしますと、すぐ田圃はもちろん畑まで冠水してしまうので、その排除にまた一苦勞という有様でした。しかし、川端や堤下に生い繁るせりやまこもは、牛馬の飼料や納屋の敷物、屋根草として欠くことのできない原材料ということで、良いに付け、悪いに付け、水とは縁が切れなかったことなどから、この里の人々は水神様を部落の守護神として祭ったのだと思います。そして、その周辺に信仰の祠が建てられたのは当然だった訳です。

開発に悩む(?)

庚申様

庚申様は、始めは水神様の後あたりの道端に塚があつて、その上に祭られていました。が、河川改修の時に基盤整備の道路の真中にかかつて塚が崩され、庚申様をお移しする場所に困つたのです。が、平素から庚申様に信仰厚かつた於幾の伊藤泰（ゆたか）さんのお宅で、自分の用地内に移してお祭りしていただきました。その後、土地改良などで、庚申様が再び移転しなければならなくなりましたので、「これからあまり移動しなくてもよい場所に祭らなければ」とい

う話から、水神様の鳥居前の現在の場所にお祭りしたのだということです。

庚申様の碑の表面には、梵字(天竺の梵天王が創つたといわれる文字)の下に庚申の二字、両側には寛保元年(一、七四一)辛酉八月二十八日、土屋伝兵衛、と刻まれています。

里人の信仰厚い

耳の神様

庚申様は、六十年目ごとに回ってくる庚申(かのえさる)の年に新らしく、所謂更新されますが、そのお祭りされて更新される場所の塚を庚申塚と呼び慣わされています。この庚申様が建立された前の年に当る元文五年(一、七四〇)は、丁度庚申(かのえさる)に当りますので、その年が水害か旱魃(ひでり)などで収獲がすくなく、講中或いは地元の人々が浄財に事欠き、とうとうその年に更新ができず、翌年もその目安が付かなかつたのを見兼ねた土屋伝兵衛という人が自力で更新されたものか、又はこの庚申様は耳の神様として里人の信仰を得ておりますので、丁度庚申の年に耳の病の治療などで、御利益、霊験などを体得された土屋伝兵衛さんが、庚申様のお陰というので、塚を築いて碑を建立されたのかも知れません。

何れにしても、今から二三年前の寛保元年に、既に苗字を名乗れた人ですから、名主様か庄屋或いは郷土など、里の人々の間では身分の高い人だつたに違いありません。土屋伝兵衛さんの屋敷跡というのは、伊藤泰さんが子供の頃にはまだ伊藤さんのお宅の近くに残っていたそうです。

写真向って左側の背の低いほうが庚申様で、今でも耳、特に耳が遠くなった人には有難い霊験があるといふので附近の人々の信仰を集めています。そして御利益を頂いたお札には、甘酒を造つて竹筒に入れて奉納する、という風習が残っているといふことです。向って右側の脊の高いほうがトツコン様(次回に御紹介の予定)で、すぐ後は産土の水神様です。この前の道路は、左は於幾の集落に、また右は栗山川に至り、栗島橋を経て光町、多古町方面に通じています。昔は松尾琴平詣りの近道として、正・五・九各月の十日の縁日の折には橋の裡に茶店が出る程賑わつたといふ話です。(今回はトツコン様の碑についてご紹介いたします)本稿取材に当り、於幾の奈良光雄さん、ならびにトツコン様と庚申様の仕守供養を続けておられるという伊藤泰さんの御指導と御協力をいただきました。

文化財審議会委員
小沢春光氏寄稿